

Title	小伝 那珂通世：草創期の東洋史学
Sub Title	A biographical short sketch of Michiyo NAKA, a founder of Oriental history in Japan
Author	村上, 正二(Murakami, Masatsugu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.145(319)- 159(333)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0145

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

小伝 那珂通世——草創期の東洋史学

村上正二

異常の学才を示して

明治時代のすぐれた史学者、いな、わが近代史学の祖、那珂通世といつても、今日の人びとにはもはや奇異に感ぜられるまで耳遠く聞き馴れぬ人名となつてゐることであらう。たしかに、明治の諸事物は、われわれの身边から遙か彼方へ遠いてしまつた感がある。時代的環境が大きく變つてしまつたのだ。だが、また、それほどまでに大きい時代的變革があつたからこそ、今日的視点から明治という過去の映像や、その歴史の意味が多少とも適確に捉えられるというものではないであらうか。

那珂通世は嘉永四年正月六日、盛岡の城下で小身の武士、藤村家の三男として生まれた。幼名は莊次郎。小身ながら武士の子として長兄の莊助とともに七、八歳の腕

白時代から藩校の明義堂に通わされ、四書五經の素読を受けた。この小柄ながら、きかん気で、骨太色黒の少年の眉宇にひらめく異常な才に、早くも眼をつけたのは、明義堂の主任教授、那珂五郎通高であつた。一人娘しかない彼はひそかにこの子を将来の聲養子に迎えたいと考へた。だが、少年の年齒わずかに九歳。ようやく藩公からの許可が下りて、那珂家に正式に入籍し、通繼（みちつぐ）、ついで通世（みちよ）と称したのはそれから五年後の十四歳のときであつたという。

養父の五郎通高は、幕末期の南部藩が生んだ奇才の一人だつた。御典医の次男坊に生まれ、藩公の近習にあげられながらも、雄心抑えがたく、十九才の折、ついに脱藩を決行。江戸に上つて昌平黌の安積良斎についたが、その固陋な朱子学的学風にあきたらず、改めて瑤池塾の

東条一堂の門に入り、学才はたちまち同輩を凌いで、東門の三傑とまで称されるにいたった。それに、ここ瑤池塾は、北辰一刀流の千葉周作の道場に隣接して、天下の志士たちがたえず出入する場所であった。年若き彼が當時この門をくぐった頼三樹三郎、清川八郎、梅田雲浜ら、多くの志士たちとともに青春の血潮をたぎらせ、時勢を痛憤したであろうことは、想像にかたくない。さらに彼は学を求めて京に上り、ここでもまた西国の志士たちのつどい集る森田節斎の門をたたき、さらに名声を慕って安芸の坂井虎山の塾に遊んだ。こうした諸国遊歴の間に、彼はおのずと吉田松陰、久坂玄瑞、桂小五郎、来島良蔵らと相識るようになってゆく。西国から江戸に舞い戻って、当時志士たちの陰れ家となっていた鍛冶屋橋門外の蒼竜軒に旅装を解いたとき、たまたま故国の南部藩内で、守旧派と革新派との抗争が起こって革新派のリーダーであった兄の春庵が虐殺されたとの情報が入った。蒼竜軒に集っていた吉田松陰始め多くの志士たちは、故国の政情に思いを致し、切齒扼腕する五郎通高に満腔の同情を注いだ。なかでも、彼のたぐいなき詩才を愛し、その直情径行の性格に惹かれた松陰は、水戸学や北辺防備の情況を探るための東北旅行を意図していた折から、五郎の

仇討の一助でもなろうかと、肥後の志士宮部鼎蔵らと語らって、三人で行をとともにすることにした。その顛末は、松陰の『東北旅日記』に詳しい。

だが、そのうち、故国では革新派が政権の座について、兄の春庵の冤も晴れ、仇討の必要もおのずと消え去った。そうして、彼自身もまた、革新派の線に沿って藩学の革新を行なうべく、脱藩以来十五年にして、藩学明義堂の教授に迎えられることとなったのである。もともとが熱情的詩人であった彼は、経学の道では強く水戸学に魅せられていたらしく、早速弘道館に倣った「学軌」をつくり、藩校の名も作人館と改めて、「和漢一致、文武不岐」のスローガンのもとに新学制の編成に余念なかった。しかし、革新派とはいえ、所詮は幕藩体制の枠内での微温な変革であり彼の新学制そのものも中央での怒濤逆巻く激しい時流に呼応すべき態のものではあり得なかった。それに、中央の志士たちとの動静にも疎くなりかけていた彼は、いつの間にか旧体制の中樞に組み込まれて、すでに旅浪時代の客気を失ってしまった感が深い。

屈辱と貧困の季節へ

幕末、維新时期という狂瀾怒濤の革命期に当って、こう

した激情的來歴をもつ養父のもとで薫育をうけた通世少年の将来が、尋常一様のものであり得なかつたことは容易に想像のつくところであろう。慶応四年正月、鳥羽伏見の戦いで決定的勝利を収めた公卿・薩長の連合政権は江戸幕府を倒すと同時に、その背後勢力をなす会津藩を中心とする奥羽北越列藩同盟に向つて兵を進めた。その同盟の一員としての南部盛岡藩の帷幄の参謀となつた作人館教授那珂五郎通高は、敗戦の結果、朝敵の汚名を着せられて、藩公父子や家老らとともに江戸に護送される。身柄をあずけられた福井越前藩の別邸で、末期（まっご）の願いとして、養嗣子の通世少年との面会が許され、朝敵という汚名の屈辱だけはどうか晴らしてくれるようにと託した。幸い、一命は助けられたものの、直ちに幽閉の身になり、那珂家にとっては、屈辱と貧困の長い季節が訪れた。

養父の助命嘆願やそののちのパージ解除に東奔西走した当年十八歳の通世少年の眼前に立ちはだかつたものは、追放になつた養父一家の生計の維持と同時に、激しく変貌してゆく新時代に、若き自己が今後いかに生きてゆくべきかの方途を発見することであつた。外の世は挙げて旧物打破に急ぐ明治政府のいわゆる御一新の諸政策であ

り、江戸は東京と名を変えて、築地や銀座には洋館が建ちならびガス燈さえ点き始めていた。文明開化の波はひたひたと庶民の脚もとまでを打ち洗つていたのである。

「そうだ。和漢の学を一時はうち捨てても、英学をやらねば」とそう決心した少年は小石川の自宅に近い、早稲田の明治義塾に通い始める。この義塾は、当時一種の夢想家的企業家といわれた紀州の藩士山東一郎直砥（なおと）が経営する英漢学塾であつたが、間もなく失敗して閉鎖となつたため、山東の紹介で、改めて明治五年五月、慶応義塾の変則科（速成科）に入社（入学）した。入社はおろか、毎月の束脩にも事欠く有様なので、懇願して福沢家の書生となり、女中たちと台所で一緒に立ち膝して早飯（はやめし）をかつこんでは、夜遅くまで勉強した。当時の福沢は『学問のすゝめ』を執筆中で、脂の乗り切つた四十歳の初頭であり、塾生も三百人を越して、まさに文明開化のご時勢を指導する一世の巨人となり切つていた。通世がここに学んだわずか一年二ヶ月の書生生活から得た、新しい知的刺戟は、彼の将来に抜き難き影響を及ぼしたものであつた。怪しげな英語力を通じてではあつたが、初めて世界の大勢というものにふれ、旧き中国の経学以外にも、政治経済学や歴史地理学

などの新しい西欧の学問体系のあることを悟ったのである。失意と屈辱のどん底に突き落されていた少年にとって、新時代到来の必然的意味をようやくのみ込めてきたし、人生の進路が開かれて来る思いであった。

前原一誠の密書届く

幸いにも、そのころ、養父の通高のパージが解かれ、かつての放浪時代の同志で、今や輝ける新政府の参議となつてゐる木戸孝允の取りなしがあつて、大蔵省や文部省に囑託ながらもいちおうの職にありつくことができた。さる一日小石川伝通院内の陋屋に木戸の使者が訪れた。それを聞いた通高は、「何、参議木戸孝允からの使いだと。木戸などという奴を俺は知らぬ。桂小五郎なら知つとるが」と嘯いたという。多年、胸中にわだかまつていた怨念の語が、思わず口を突いて出たものでもあろう。いずれにしても、那珂家にとっては、一陽来復の思いであつた。

はやばやと変則科を終えた通世は、福沢の世話で明治八年五月毛利藩が萩に開いた洋学校、巴城学舎に英語教師として迎えらるることとなつた。月俸五十両、当時としては破格の優遇である。初めて洋服というものに身を

固め、義塾お払い下げの洋書を行季一杯に詰め込んで、意気揚々と新橋から陸蒸汽に乗り、横浜からは便船で大阪を経て三田尻港に向い、山越えに萩の城下町に入った。ここ長州は、かつての南部藩士那珂通世にとっては怨敵の地であり、いまは新政府の臣頭連を輩出させ、革新的精神にみちあふれて文明開化の行き渡つてゐるところかと、彼はひそかに期待してゐた。ところが来て見て驚いたことに、新時代への起爆の地とさえなつたこの町が、いまではすっかり時代の進展から置き去りにされて、封建時代から受けついで、そのままの何か陰惨で殺伐たる空気にさえ包まれていることであつた。ともかく、彼はかつての毛利家の藩校・明倫館内に設けられた巴城学舎の講堂で百三十人ほどの生徒を相手に英学を講ずる身とはなつたがこの講堂のすぐ隣には、新時代の知識を市民にひろく普及させる目的で、中央の新聞や書籍などを備え付けた、今日の公共図書館のような「書籍場」が設けられていた。だが、当時この書籍場は、秩録処分で半ば失業化した不平武士たちが徒党を組んで寄り集り、長脇差を叩いては、新政府を非難する、彼ら一味の集合所と化していたのである。ここで、彼らは維新政府の樹立に功績のあつた長州士族階層の窮乏を無視して欧化政策を

進める中央政權打倒の計画を練り、大いに氣勢を盛り上げていた。この情勢を見て、那珂は長居すべき場所ではないと知って、わずか一年で萩を引き上げる決心をした。そして、彼が出立するその間に、前原一誠の使いと称して、謀將奥平健輔自ら彼の居宅を訪れ、「どうか、これをご尊父へ」といつて一通の密書を手渡した。道中開封してみると、それは養父の通高に宛てて、「貴公はかつてはわれわれと勤皇の志を同じうした一味のものではないか。木戸など腐敗分子の厄介にならずに、われら正義の党たる前原に味方し、江戸の蹶起部隊に加わってはくれまいか」という内容のものであった。帰京してから、養父に見せたところ、通高は「いまさら、俺のような刑余の者に向って、何と血迷ったことをいう徒輩だろう」と寂しく笑って相手にしなかったという。

学則から教科書まで

無事に帰京した通世にはふたたび福沢からの呼び出しがあった。このたび千葉の師範学校とそれに新たに付設される中学校の両者の校長として赴任しないかとのことであった。あの、何とも異様な空気のなかでの巴城学舎の英学教育とは違って、今度こそは、自分の得た新知識

と教育理念とをテストし得る絶好の場所に、彼には思えたのである。明治五年の学制令発布以来、全国には七つの国立の師範学校と英語学校とが設けられたものの、それらには準拠すべき学則もなければ、カリキュラムもなく、教科書さえ殆ど取揃えられてはいなかった。二十七歳の若き校長、那珂通世は新しい希望で胸がはずんだ。加えて当時の千葉県知事柴原和はすぐれた開明派官僚であり若き那珂に全幅の信頼を寄せて、存分にその腕を振わせてくれた。その信頼に答えて、那珂は夜も寝ずに新学校の建設に邁進する。校舎の建築計画をもとより学則の決定からカリキュラムの作成、教科書づくりに至るまで、殆どすべてが彼の創作に係るものであった。彼にとつて、慶応義塾で学びとつた新しい知識が、これほどまでに役立つこともなかったろう。学則はもとより、ロビンソンの算術教科書、義塾で学びとつた英語読解法、養父から習つた国文法の知識、それに那珂自らが作り出した新仮名づかい法まで、一切の知識を総動員し、教授法にもそれぞれ独特の趣向をこらした。また女子師範が併設されると、裁縫科が必要だというわけで、彼は県下の長生町で私塾を開いていた裁縫師渡辺辰五郎を抜擢して、教師に迎えた。当時としては、破格の英断であつ

た。

千葉県での校長としての噂が高まるや、彼は招かれて、中村正直が摂理（校長）となっていた東京女子師範学校の幹事（教頭）に就任した。ここでも、彼は前任地で得た経験をフルに活用させて幼稚園保育法、付属小学校、付属女学校法などの学則規定から、家政学、割烹学、修身礼節学、国漢文などの女子にふさわしい新カリキュラムの編成にいたるまで、懸命の努力を払った。そして、裁縫教育のためには、前任校から渡辺辰五郎を引き抜き、新学科創設に必要な教員を大量採用した。こうして女子教育に専念すること前後七、八年、やがて彼は東京女子（高等）師範学校長に補せられる。

この間、明治の世相は大きく変貌しつつあった。時は十四、五年の自由民権運動の昂揚期を過ぎて不平等条約改正を前に大童の明治政府が、外人の歓心を購うために大々的に欧化一辺倒の主義を採り始めていたのである。いわゆる鹿鳴館時代の到来であった。そのころは靴を穿き、洋装したハイカラの女高師生や女学生が帝大生と手をつないでダンスをするという風景も見られ始めた。それがまたたちまち世の指弾的となり、女子高等師範学校長那珂通世は政府の欧化熱の片棒かついで神聖な教育

の場に淫靡な風習を導入したとて新聞社から大いにたたかれた。養父にも似て激情家であった彼は、憤慨して、早速新聞社に怒鳴りこんだ。やがて新帰朝の森有礼が文部大臣となり、その抱懐するところの国家主義的教育方針をうち建てる時、彼は感ずるところがあつて、多くの同僚らとともに職を辞した。そのなかには、彼が抜擢した裁縫教員の渡辺辰五郎や、終生那珂を敬慕して止まなかつた沼津兵学校出身の数学教師宮川保全らがいた。早くから女子職業の必要性を説いていた宮川は、辞職するや、那珂や宮川の教え子であつた、のちの鳩山春子とともに、共立女子職業学校を設けた。また渡辺は東京裁縫学校を開いた。前者は今日の共立女子大学の前身であり、後者は東京家政大学となつてゐるが、那珂は死ぬまで、この二人の女子教育上での熱心なパトロンであつた。

学者としての道悟る

辞職したのちの那珂は、元老院の書記官などになつてしばし飯を喰いつないだが、長年女子教育の創設に努力している間に、いつの間にか中年になつてしまつた自己を発見した。敬愛してやまなかつた養父の通高を轆轤不遇のうちに死なせて、ひどく悔恨の念に襲われていた彼

は、今後どのような運命に遭うとも、やはり養父と同じ学者としての道を歩む以外に、自己の心情に忠実な道はないことを悟るにいたった。かつて養父は老後の楽しみに、旧友らと「洋洋社」という結社をつくり『洋洋社談』という月刊の小雑誌を発行していた。若い彼もそれに「上古年代考」という一文を草して投稿したことがあった。わが国上代の年代が中国や朝鮮その他の諸国の史籍に照して検討してみると、曖昧でありしかも作爲的に延長された跡があるという趣旨のもので、着想といい、考証の仕方といい、極めて斬新なものであった。養父からの影響もあつてか、若き日から史学への関心や教養がひとしお深かつたのであろうが。

なお、彼が長い教師生活を通じて感じたことは、世界史とか万国史については西欧にすぐれた教科書が多くあるにも拘らず、アジア諸国の歴史については、従来はせいぜい『十八史略』とか『皇明史略』といった旧式なものしかなく西欧にみられるような文明論的教科書に全く欠けているということであつた。では、ひとつ己が漢学的、英学的知識を応用して文明史論的中国史を叙述してみようかという考えが浮んだ。幸いに元老院の職は暇だし、その間もなくその元老院も廃止となつて免職された

のを幸いに、彼は著述に専念して、明治二十一年の終りには著名な『支那通史』六冊を刊行することができた。当時の習慣で、漢文で書かれたものだったが、各時代ごとに彩色を施した歴史地図を附し、簡にして要を得た制度、文物の記載があつて、中国の歴史を概観できうる、きわめて画期的な著述であつた。刊行されると、当時の諸学者の激賞するところとなり、清国では、新式学校の教科書として上海で翻刻出版するほどの評判となつた。

学問に忠実な学徒

だが、那珂はあくまで学問に忠実な学徒であつた。『支那通史』六冊は実は上古から宋代までで、それ以降続けて執筆する予定であつた。だが一向に筆が進まない。モンゴル帝国史や元朝になると、文献が少くなるだけでなく、もはや漢籍だけの知識では、茫漠として捉えがたいものがあつた。迷ひ抜いていたところに、たまたま、慶応の後輩で、千葉中学校時代の同僚であつた、のちに彼の無二の親友となる三宅米吉（のちの東京文理科大学長）がヨーロッパから帰朝して、アジアに関する数十種に上る欧米人の著述を購入して来たのであつた。それを見せられて那珂は一種名状し難い感動に襲われた。遠い

ヨーロッパの国々ではアジアに関してこれほどまでに研究しているというのに、同じアジア人たる日本人はアジア諸国の歴史については殆ど無知に近いのではあるまいか。よし、これら、英、独、仏、露人たちの研究を自分のものにしてやろう。そしてその上に立って、日本人の独自の研究を展開してみせようではないかと彼は考えた。だが、彼は英語をわずかに知っているだけで、ドイツ語もフランス語も、いわんやロシア語も知らなかった。よく知っているのは、ただ漢文漢語だけである。ところが、西欧人の著述を見ると彼らの言語ばかりでなく、よくアジアの諸言語に通じ、それぞれの語の文典も辞典も揃っており、それら原典に基いた、真に学究的な研究を行っていたのである。

世界各国語の独習へ

そこで彼は何とかして漢文以外のアジアの諸言語を調べてみたいと思い、まず三宅から英語で書かれていたメルレンドルフの『マンシユウ語文典』を借受けて勉強してみた。ひどく変てこな文字だが、馴れてくればさほどに困難でもないし、単語は大分違うが、文法はまるで日本古代語と同様である。これらの言語はアルタイ語系とは

聞いていたが、彼はこれほどまでに近似しているとはつゆ知らなかった。これなら、同じアルタイ語系のモンゴル語だつてもものに出来ぬことはなかるう。そう考えて、今度は三宅からシユミットの『モンゴル語文典』と『モンゴル語辞書』を借受けることにした。ところがこの文典はドイツ語で書かれており、辞書はドイツ語とロシア語とでモンゴル文字を説明している。彼はまずモンゴル語征服のために、ドイツ語の自学自習に取組んだ。また、ロシア語もやらねばならぬ。これは函館でニコライ司教に習ったという同県人大和田某から手ほどきを受けた。そうしてどうやらドイツ語がわかりかけて来ると、シユミットの『モンゴル語文典』の解説に喰らいついたのであった。

新しい史学への刺激

さて、ここで明治初頭における史学の一般的状況を瞥見してみることしよう。まず、明治初年から十年ごろにかけては、バックルやギゾーなどの啓蒙的文明論史書の翻訳時代であったが、次の十年から二十年にかけては、この啓蒙史学の理論を日本や中国にも適用して、田口卯吉の名著『日本開化小史』や『支那開化小史』または那

珂の『支那通史』などが刊行されて、江湖の歡迎を受けた時代であった。しかし、それも二十年代を境にして、ほぼ時代的作用を果し尽したものと云つてよい。進展してゆく時代は、早くもこうした啓蒙主義的文明史觀に代るべき新しい史学の出現を待望し、模索し始めていたのである。ちょうど、そのころ、学制改革で創設された帝國大学文科大学史学科に、ドイツ実証主義史家ランケの弟子、ルードウィヒ・リースが招ねかれて、わが国にもようやくアカデミズム史学が誕生しようとしていた。この新史学は史料を組織的に蒐集し、それに対する厳しい史料批判を通じて、世間に根強くはびこっていた儒家的名分論や勸善懲罰的史觀を真向から否定し、事實はあくまで事實そのものとして把握し、追求して行こうとする徹底した考証的実証主義を唱えたものであり、それは同時にまた、旧来の万国史風の文明論的啓蒙史觀からの離別をも意味したものであった。

いずれにしても、古い私学の出に過ぎず、そののちは独学の道を通ってきた那珂にとって、この帝大史学科の旧物打破的新学風は、新鮮で、かつ強烈な刺激であった。若年の折ものした「上代年代考」に示された彼の日本古代史への情熱は、ここでふたたび燃え上った。記紀など、

それまで半ば神聖化されていた日本古典を朝鮮や中国の諸文献によつて徹底的に史料吟味を行ない、それに基づいて彼は三たびこの論文を書き改め、「上世紀年考」と改題して発表した。引きつづいて、彼は古代における日本、朝鮮、中国との三国間の錯雑した諸外交的關係にメスを入れ、緻密で実証的な研究に没頭した。こうして、明治二十六年ごろから三十年にかけて、「朝鮮古史考」「高句麗古碑考」「倭奴国考」「魏志倭人伝」などに「外交釋史」に収められた数々の名篇が発表されてゆくのである。そしてそのうち、いつの間にか、彼は帝大の諸教授やその出身の学徒たちよりも、ずっとすぐれた実践的な新史学の先達の一人となつていた。現代日本人の興味をいまだにそそつて止まない「魏志倭人伝」やそれをめぐる古代日本国家成立の諸問題が、実はこうした明治二十年代における那珂の一連の研究から出発したことを知悉する人は、今日案外に少ないのではあるまいか。

新区分のカリキュラム

きわめて激情的で、すぐに他人と衝突し、喧嘩しては辞職を繰り返したという那珂は、この間にいろいろと

職を変えたが、学者としての名声が高まるようになって、ようやく第一高等中学校および高等師範学校の漢文、支那史担当の教授の職にありつくことができた。東洋史という学科は、当時はまだ成立していなかったのである。彼はこれらの学校で、いわゆる「支那史」を講義しつつも、朝鮮はもとより、マンシユウ、モンゴル、トルコなどの北方の諸民族あるいは中央アジアのオアシス諸国家の文化、東南アジア、インドなどの特殊的社会をも含めた中国を中核とする広いアジア史的構想を大胆にも描き始めていた。そうした観念を抱くようになった第一原因は、『支那通史』を執筆した際に感じたことだが、中国自体の研究を進めるに当たっても、いくたびとなく中国内部に侵入し、これを征服した北方諸民族の歴史的動向はもとより、中国的世界とヨーロッパ世界との文化的橋梁となつた中央アジアのオアシス都城文化やさらに、チベット、インド、東南アジア地区特有の宗教文化までを適確に把握せねばならぬという彼自身の体験からにじみ出た痛烈な自覚であつた。第二の要因は、三宅が西欧から持ち帰つた多くの洋書から受けた西欧人学者のアジア研究の緻密さと多彩さにあつた。

内藤湖南と識り合ふ

こうした体験から、那珂は旧来の十八史略的中国史観と万国史風のアジア観から離脱するためには、どうしてもヨーロッパ中心の歴史研究とアジア各国の歴史研究とはそれぞれ別箇の領域として分離独立さすべきものと悟つたのである。因みに、当時のインテリア間の歴史観を紹介するなら、例えば、天野為之が自著『万国歴史』の序において「悲ヒカナ東洋ノ文化東洋ノ人民ハ世界全体ノ大運動ニハ秋毫モ関係ヲ有セズシテ万国史上ニ其名ヲ留ムル丈ケノ功績アラザルヲ如何センヤ」と論じたほどで、後年、白鳥庫吉が「是れ蓋し大いに邦人をして誤らしめたる思想の一つならずんばあらず」と慨嘆されたことを想起されたい。かかる情況のなかにあつて、高等師範の教授という職業がら、那珂はまず中等教育の場において、このことを主張し、従来の「支那史」「万国史」にかえて、「東洋史」「西洋史」という新区分に基づく独立のカリキュラムを組ませ、それぞれの教科書によって世界史を学習させることとしたのであつた。だが、帝大では、その後もしばらくの間、西洋史中心の史学科と和漢科から分離した国史料の二つがあつたばかりで、いわ

ゆる「支那史」は漢学科中の哲・史・文のなかに閉じ込められたままであった。

そのうち、那珂は当時漢学通の新聞記者として令名の高かった内藤湖南と識り合った。彼はたちまち内藤の談論風発と深い漢学への造詣に魅せられたが、内藤側でも、那珂は偏窟だが、並々ならぬ学者であることを見てとつた。それ以来、二人は旧知の如き間柄となった。がんらい、内藤家は鹿角（かずの）出身の南部藩士で、父の十湾は那珂の養父通高に私淑し、藩校時代にはその門弟だった好しみもあつた。のちに、京大教授となつて多くの俊秀を生み出し、いわゆる「京都シナ学」の伝統をきずいた内藤湖南と東京にあつて「東洋史学」という新道を切り開いて行つた那珂通世との東西二人の巨人的学者が、同じ南部藩の出身者であつたということは、大變に興味深い。

天下の奇書に取組む

那珂は内藤の紹介で明治三十二年来日した清国の学者、文廷式や陳毅と会見して、元朝史に関する多くの文献の存在を教えられ、その寄贈を受けたことは、有難かつた。おかげで、那珂の元朝史研究も進捗しようというもので

ある。しかしそれよりも、那珂、内藤の二人を驚かせた最大のニュースは『元朝秘史』といつてモンゴル語で書かれたモンゴル時代の史書の存在で、ちょうどわが国の万葉集が万葉仮名という特有の漢字音で写されていたように、『秘史』のモンゴル語はいちいち漢字音で音訳され、それに漢文の要訳までがついているという話であつた。しかも、この書は清国人学者の間でさえ、少数のものを除けば、あまり知られていないともいう。二人の学問的好奇心と興奮とはいやが上にもかき立てられた。是非その写本を送つてはくれまいかと二人は懇願した。そうして、三十四年も終りに近く、大阪朝日の記者として同地にあつた内藤のもとに、六冊の龐大な写本が送られて来たのである。内藤は早速人を雇つて書写させ、一本を高等師範学校の那珂のもとに送つた。当時、シュミットの『モンゴル語文典』と格闘していた那珂の喜びは、筆舌に尽しがたいものがあつた。この天下の珍書を前にして、彼は世界の諸学者に魁けて、これに訳注を施してみようという野望に取りつかれてしまったのである。

そのころ、彼は帝大にも講師として招ねかれて、漢学支那語第三講座を担当していた。講義では、もっぱら「東西文化交渉史」をやり、演習では、顧炎武の『日知

録』を読んで、中国の制度史を講じていたようである。彼は一日支那史専攻の学生に向つて、『元朝秘史』という天下の奇書を手にし得た喜びを興奮して伝え、「誰かモンゴル語を学習して、この奇書の訳注を試みるものはいないか」と熱心に口説いてみた。帝大生ならば、自分などより英語もドイツ語も出来ようし、ヨーロッパ語で書かれたモンゴル語文典なども容易に読みこなせるだろうと期待したからである。だが、若い秀才たちであるはずの学生の間からは、誰一人として那珂のこの切なる願いに応ずるものはいなかった。「そうか、誰もやらぬというのか。それなら、この俺がやってみせる」と、彼は心に深く決意した。

それからというものは、毎日真剣にシュミットの文典と辞典と首引きでモンゴル語の自学自習が始った。そして『秘史』の本格的訳業に取りかかったのである。もとより、翻訳だけでは、史書としての利用価値は半減しよう。そこに記述されてある史実を裏づけ、真偽のほどを定めねば、大した意味はない。しかし、そのために涉猟すべき東西の文献は夥しく、それらを読破するだけでも並大抵の業ではなかつたはずである。それはまさに本居宣長の『古事記伝』にも匹敵すべき訳業であり、わがモ

ンゴル学にとつては杉田玄白や前野良沢らの「蘭学事始」にも似た「モンゴル学事始め」であつたといつてよい。

欣然モンゴル語の講義

那珂の『元朝秘史』の訳注は、多分明治三十五年の終りごろから始められ、三十八年の終りには、ほぼ完了していらしい。わずか三年間に精根をこめて、集中的にやりおせた大訳業であつた。そのころ、帝大生で那珂の講義を受け、元朝史の専門家として、のちに東大教授となつた箭内互は、愛用の自転車に乗つて講義にやつて来る那珂に向つて、「先生、どうですか、『秘史』の進み具合は」と尋ねると、車上ニコニコと眼を細めて「もう半分は越したよ」とか「やつと三分の二の峠を越した。もう少しの辛抱だよ」などといつて、会釈をしながら、訳業の進捗状況を知らせてくれたという。

そのころの那珂は完全に『秘史』の訳業の虜となつていて、外のことは一切頓着しなかつたらしい。当時、高師の学生で、那珂の最後の受講生となつた諸橋轍次博士は、往年を回想しながら、筆者につきのような話をされた。

そのころの那珂先生は洪鈞の『元史訳文証補』など、『元朝秘史』と関連ある文献ばかりをテキストに使われるので、初学生であるわれわれは何が何やら一向に分らず、面白くなくて困った。それで、学生が英語かドイツ語の本を取り出して内職をやり始めると、それを見つけた先生は、顔を真赤にして激怒され、教壇からツカツカと降りて来て、その生徒から本を取り上げてビリビリその場で破り棄ててしまう。これにすっかり手を焼いた生徒たちが嘉納治五郎校長のところへ嘆願に行った。ところが、嘉納さんから「那珂さんは偉い学者なんだよ。世界的学者なのだ。今つまらなく思っても、よく聴いておけば、後日必ずや為めになったと思う日が来るだろうよ」と訓されてしまった。そののちも、那珂先生のご態度は一向にお変りにならない。ところが、仲間うちに一人の知恵者がいて、うまいアイデアを持ち出した。「那珂先生は目下モンゴル語に夢中なのだから、漢文の代りに、モンゴル語を教えて下さいとでもいったら、どうだろう」というのである。「そいつは名案だ」とばかり早速衆議一決して、先生に申し出てみた。

すると、先生は相好を崩されて「帝大生さえ尻込みしてやろうともせぬのに、君らが進んでモンゴル語をやり

たいとはさすがに偉い。実にいいところに眼をつけたものだ。では、早速明日から教えてやろう」といわれた。そして、明朝の授業から、黒板一杯に、変てこなモンゴル文字のアルファベットが書き並べられ、発音からついで文法の講義とは相成った。最初は冷かし半分で聴講していた生徒たちも学年末が迫ってくると、モンゴル語の試験がこわい。この一年中は、先生のご機嫌はいともうるわしく、おかげで授業中怒鳴られることもなかった代りに、大変な重荷を背負うこととなってしまった。はてさて、どうしたものかなと、みんなで思案投首である。すると、また例の知恵者が膝を乗り出して、「よし、この俺が先生を説き伏せてくる」といつて出かけていった。「先生、試験はどうなさるおつもりですか。僕たちモンゴル語の授業は大変面白くて、為めになったのですが」というと、先生はまたニコニコされて「君たちは実によく聴いてくれた。試験などはもうやらなくとも宜しい」。その報告を聞くと、われわれ一同大いに安心して、拍手喝采だったという。

唯一の道楽は自転車

那珂通世は学問以外の俗世間とは殆ど没交渉の人間で

あった。新聞記者出の内藤とは違って、政界や財界または操觚角にも広い知己を持たず、ただ教育と学問一筋に生きた鬼といつてもよいであろう。その点は同じく激情的性格の持主ながら、行動派の養父通高とは、人生の軌跡を明らかに異にしていた。だが、己が政治的行動に蹉跌して、不遇の晩年を送った通高は、むしろ通世のような、ひたむきな人生態度を大いに是認していたようである。家庭的には、妻や長女、次女の病弱に悩まされ、給料の大半は医療費や書籍代に費やされて、生活は常に楽なものではなかった。こうした、無趣味で、学問一途に見えた那珂にも、たった一つの道楽があった。それは当時インテリの間に行き始めていた自転車旅行だったのである。明治二、三十年代の自転車といえば、さしずめ今日の外国製のスポーツカーにでも当ろうか。身体はきわめて頑健であり、辺幅は飾らなくとも、感覚的には案外なモダン好みで、運動感覚にも長じていた彼は、愛用の自転車を駆つては、日本全土はおろか、朝鮮や台湾やマンシュウの果てまでも駆け回った。そして、みずから「転輪居士」と称し、アメリカの自転車会社の広告に堂々と出てみたり、当時人気の的となつていた自転車レースに若者たちと一緒に出場しては、その十傑のなか

に選ばれ、得々然として記念写真を撮るなど、稚氣愛すべきものがあつた。

なお、彼に関連ある逸話としては、人生不可解という巖頭の辞を残して、明治三十六年五月に華巖の滝に散つた一高生、藤村操は、那珂通世の実家の長兄、藤村胖（幼名莊助）の長男であつた。藤村操と同級で、のちにその妹の京子を娶つた安倍能成は、藤村は同級生のなかでも目立つほどの美貌の秀才で、大輪の花が咲くが如き感じであつたという。現在の北海道拓殖銀行の取締役をしてきた父の胖が死んで、母や弟妹と一緒に東京に移つて来て、間もないことであつた。通世は自分の長男の又世が元氣者だが、一向に学者的性格をもっていないことを知悉していただけに、この美貌で秀才の甥に期待をかけること、頗る大きかった。それだけに、操の死を痛む彼の心情は、切たるものがあつたに違いない。

新進白鳥庫吉の登場

那珂は明治三十七年七月、ヨーロッパから新帰朝の白鳥庫吉が漢学支那語学第三講座担当の正教授となるに及んで、東大の講師を辞した。この白鳥は那珂がかつて千葉中学校のとき、木内重四郎（岩崎の女婿で、加藤高明

首相の義兄）や石井菊次郎（石井・ランシング協定で著名な、のちの外相）らとともに、すぐれた三人の生徒の一人であった。そして、帝大史学科が創設された二十一年に入学し、二十三年に卒業した史学科第一回の卒業生であり、リースから受けついだランケ史学の信奉者として、始めは西洋史専攻の徒であった。それが、卒業後、学習院教授としてアジア諸国の歴史を担当させられるようになったから、にわかにはアジア史研究の重要性に目覚め、それ以後は朝鮮やマンシュウ、モンゴルなど北方諸民族の分野に精力的に研究の手を拡げて行った。そうして、いまや帝大新史学派の驍將の一人として、那珂の眼前に現われ出て来たのである。

那珂はかつての教え子の一人がこのようにすぐれた東洋史学者として成長し来たことを喜ぶと同時に、辞を低うして、高師にも講師として招いた。白鳥は古い漢学の徒の那珂とは異つて、各種のヨーロッパ語はもとより、アルタイ諸言語にも通じていた。だが、このような新進学徒の出現を前にして、那珂は毫もたじろぎはしなかつた。ただ、ひたすらみずから自己に課した『秘史』の訳業の道を邁進していたのである。

ところで、奇しくも那珂が帝大から身を引き、新たに

白鳥が正教授になつてから、ようやく東大では、国史および史学（西洋史）に加えて東洋史専攻学生の規定が出来上がり、四十年始めて正式に、東洋史学科の学生が出るようになったのである。この明治四十年こそ、わが東洋史学にとつて記念すべき年であつた。那珂の畢生の事業であつた『秘史』の訳業はこの年に完成して刊行され、また、同年白鳥がこれまで貯えた豊富なアルタイ諸言語の知識を活用して、画期的な雄篇「蒙古民族の起源」を世に問うたからである。そのみではない。前年度に創立された京都大学文学部には、この年になつて始めて東洋史学科が置かれ、内藤湖南および桑原隲蔵（桑原武夫氏の父君）がその講座を担当すべく招ねられたからでもあつた。こうして、東西両大学に東洋史学科が成立し、その画期的発展が期待されるのを眼前に見て、那珂はその翌年の四十一年三月二日の払暁、胸の痛みを訴えながら突然死んでいった。頑健で、一生涯病氣を知らなかつたという那珂は、恐らく極度の勉強から来た過労が原因となつて、狭心症でも仆れたのであろうか。卒年五十八才、まだまだ活躍できる年齢であつた。彼の紆余曲折を経た生涯は、つねに創始者が経ねばならぬ荆棘の道だつたのではあるまいか。